

空手道詳説（44）

第2章 沖縄史の概説

4 沖縄史の概略（その7、琉球の言語と文化）

（2）空手と沖縄の言語

ア 空手と沖縄語

2) 冊封使が伝えたといわれる型と沖縄訛り

明の太祖洪武帝の招諭を受けた中山王察度は、1372年に使者を派遣して朝貢を行い冊封体制下に入ったのが、明を宗主国とする国交のはじまりであった。1404年には最初の冊封使が来琉し、以降国王が交代するたびに冊封使が訪れ、最後の尚泰王（1843～1901年、在位1848～72年）の1866年まで合計22回を数えた。

空手道には、冊封使が伝えたといわれる型が「クーサンクー」と「ワンシュー」の二つある。伝承のとおりなら、トーデ佐久川（諸説あるが1786～1867年）が中国（清朝）から帰国して拳法を伝えとされる時代よりかなり古い。この二つの型は、真実冊封使が伝えたものかどうかと、沖縄訛り以前の名称など金城氏の著書「空手伝真録」から引用しながら述べてみる。但し、補足する形で筆者が「補注」として加筆した。

- ・ クーサンクー・・・「クーシャンクー」「公相君」（コウソウクは、首里手の代表的な存在で、世界中で最もよく知られた型の一つである。動作は軽妙で変化に富み、しかも美的であることから好感を持たれ、「クーサンクー踊り」となって舞踊化され、民衆が琉歌と三線（サンシン。福建省で生まれた「三弦」を原型とし、琉球で独自に発展した弦楽器で、三味線の起源とされる）に合わせ軽妙に踊り楽しんでいたことでも知られている。手（ティー）の修練過程で何時から型があったかどうか確認が難しい現状において、伝承のとおりならば、この型の移入時期は異例的に古いことになる。

それらを考証するにあたり、空手に関する資料文献が極めて乏しい状況下において、クーサンクーに関しては引用文献として「大島筆記」が取り沙汰される。

1609年（慶長14年）薩摩藩による侵攻を受けた琉球国は、その後は薩摩藩の付庸国的立場となり、春秋の二回薩摩藩に米、砂糖他の貢納物を送る正式官船の楳船（カンシン）を派遣することになっていた。

第14代尚穆王（1739～94年、在位：1752～94年）代の1762年（宝暦11年）のこと、使者と貢納物を積んだ立夏の楳船が旧暦4月26日（新暦5月19日）薩摩に向けて出航したが、途中で暴風雨に遭って遭難し、現在の高知県幡多郡柏島市沖を漂流中に発見され、7月22日に宿毛市の大島に曳航された。この時の乗組員は、潮平親雲上盛成以下52名であった。

土佐藩は、藩内の儒学者戸部良熙（とべ よしひろ、1713～96年）に乗組員から事情を聴取して書き残すよう指示した。その過程で戸部と潮平親雲上の間に肝胆相照らす如き関係が生じたことが幸いし、中身の濃い「大島筆記」という古文書が残された。

内容として、琉球国の歴史と伝統、18世紀半ばの琉球国内の事情や中国（清朝）との関係など詳細にわたる記録は、資料としての価値は勿論ながら、拳法伝来に関するのではないかと推察される部分が注目された。巻三「雑話上」にある次の記載がそれである。

先年、組合術（良熙謂う武備誌載する所の拳法ときこゆ）の上手とて、本唐より公相君（是は称美の号なる由なり）弟子を数々つれ渡れり、其わざ、左右の手の内、何分一つは乳の方を押え、片手にてわざをなし、扱足をよくきかする術也。甚瘦せて弱々したる人でありしが、大力の者、無理に取り付きたるを、其俣（そのまま）倒したる事など有しなり。

筆者註1：原文は片仮名であるが、平仮名に改め、金城氏著書に拠った。

註2：原文に句読点はない。

註3：公相君には、「コウシャンキン」の振り仮名あり。

註4：「扱足」は「さてあし」と読む。この字は「扱」と同義で、普通には魚を刺す漁具（ヤス）、又は文章の前の接続詞として使うが、他に「打つ」、「たたく」（拳をもって打つ）の意があって、ここでは足をもって相手を打つ（蹴る）意味となる。（参考：諸橋轍次著「大漢和辞典」巻五、104頁）

以上を受け、金城氏の論を以下のとおり要約し記す。

口承ではクーサンクーは人名だと伝えられてきたが、戦後になって数々の説が出てきた。

- ① 「公相君」は人名である。
- ② 「公相君」は官職名である。
- ③ 公相拳という拳法流派の名称である。
- ④ 確証がなく、風聞に過ぎない。

などがそれである。

これらについては、

① の説では、中国人の姓は1字が多く、二字、三字、四字のものは漢民族を支配した満州族(1636年明朝を倒し清朝を建国)貴族にみられる。中国人に「公」1字の姓は皆無に等しい。頭文字に「公」の付く二字の姓は数あるが、「公相」の姓は見られないため、人名ではないだろう。

② の説では、「公相」は「三公宰相」の略で、皇帝を補佐し国政を執行する最高位の大臣のことで、とてつもなく高位高官を意味する。そのような高官を、属国的存在の琉球国に派遣するはずがない。「公相君」はクーサンクーの当て字であって、正字原語ではない。

③ の説では、福建地方の方言では「君」「拳」ともに「クン」と発音し酷似するが、「公相拳」という門派はなく、古文書にも過去に存在した形跡はない。ただ、福建省閩南地方に「相公拳」というのがあり、中身は猴拳(猿拳)である。

④ の説では、確証がなく風聞いという考えには、『火のないところに噂は立たず』で、現に「クーサンクー」という型が存在し、文献の公相君とは語音も近似しているし、潮平親雲上たちは見学した事実をありありと具体的に口述していることから、単なる風聞ではなかったはずである。

以上四説の共通点は、いずれも「公相君」なる字義にこだわり固執しているのが問題でないかと述べ、続いて

「先年、組合術(良熙謂う武備誌載する所の拳法ときこゆ)の上手とて、本唐より公相君(是は称美の号なる由也)弟子を数々つれ渡れり・・・」とあって、括弧内の文は口述を記録した戸部の解説で、公相君という語句は人名でなく称美の号であると述べている。

学問技法の名人、達人をほめたたえる称号には、音楽作曲の神技に達した人なら「楽聖」、詩人なら「詩聖」、剣術のそれは「剣聖」である。それでは拳法の神技に達した名人なら、やはり「拳聖」であり、「拳聖君」である。

「拳聖君」の語音は福州では「クンセーケン」であり、泉州では「クンシャーケン」であった。また、その土地の長老に自説を述べたところ、目を輝かせて『その通りだ』とうなずいて下さった。

沖縄首里手の「クーサンクー」型は、中国福建省より渡来した南派拳法の名人が伝えた秀れた「型」であった。したがって、「クーサンクー」の正字は「拳聖君」であり、正しくは「クンセーケン」または「クンシャーケン」と呼ぶべきである。

「公相君」は「拳聖君」の当て字だったのである。

更に、「大島筆記」の文中にある「組合術」については

当時の島民は空手道のことを「組合術」と称していたとする説が定説になりつつあるが、このことは一考を要するよう思う。

中国王朝時代においては、「拳法」はまたは「拳」は、広義においては武術全体を意味することがあり、狭義には徒手武術を意味することがある。(中略)

それはさておいて、一口に中国拳法といえ狭義には徒手空拳の意味だが、それには幾つかの技法領域があつて、術技の体系によって名称が異なる。即ち、拳術(突く、打つ、蹴る)の他に大兵肥満の者を弱力で組み伏せたり、人体の急所を抑えて無力にしたり、関節をはず術などである。

「大島筆記」の一文からして、それは明らかに拳術ではなく柔術に近い秘技を披露したのを見学したのではあるまいか。当時の士族は、その武技を「組合術」と造語したのでないか。それは後世になって「取手」(トゥイデー)と呼ばれ、それに対して空手道(拳術)は単に「手」(ティー)と称したのではなかったろうか。(中略)

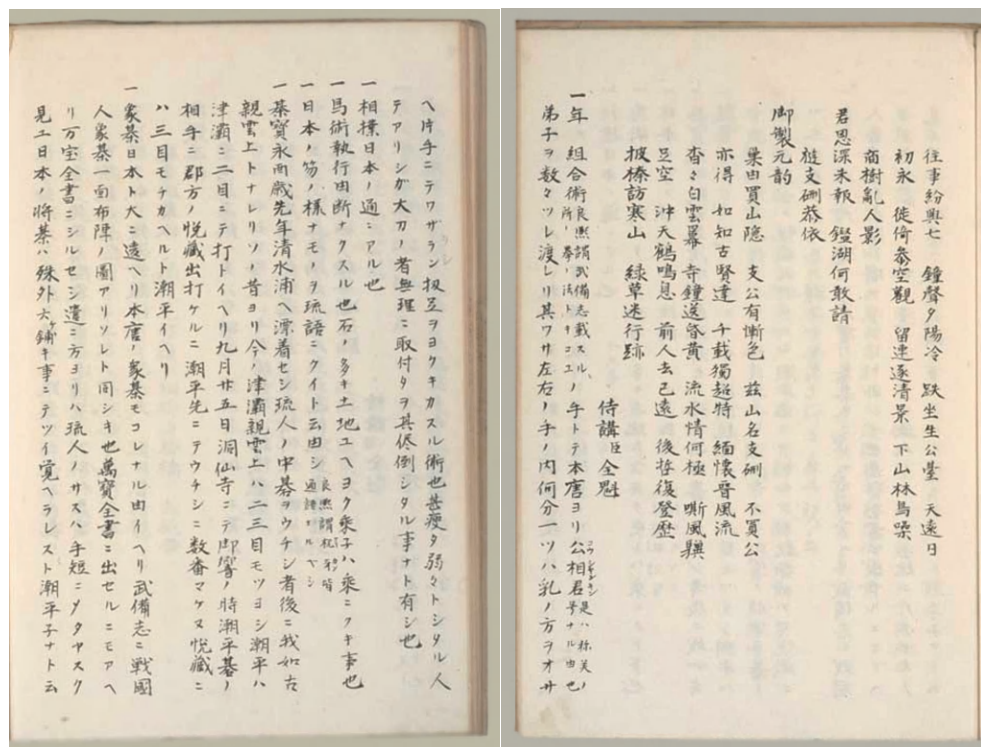
まさに「クーサンクー」型を伝えた中国武人は、拳法全体に通曉し、また兵法にも通じた人物で「拳聖君」(クーサンクー)と崇められた拳法名人だったと思われる。しかし、その本名は今では知る由もない。

金城氏によるこれら考察のとおり、この型も「クンセーケン」、「クンシャーケン」から沖縄訛化し、現在の「クーサンクー」又は「クーシャンクー」となったものであろう。

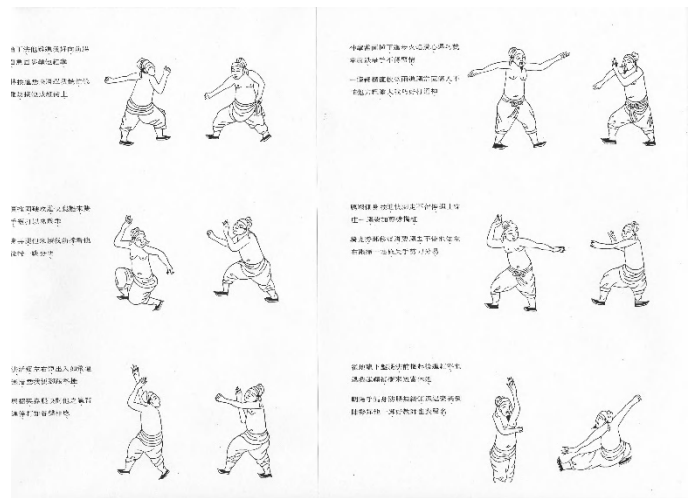
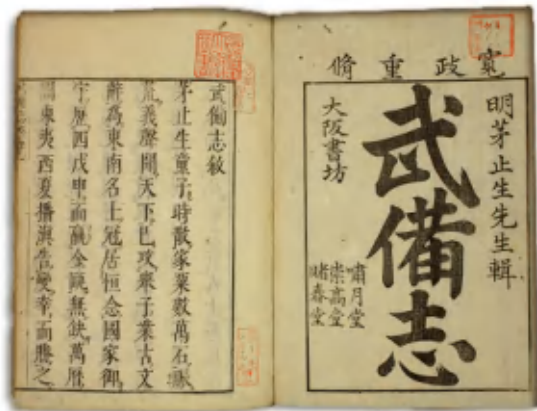
【筆者補注】

1) 大島筆記の琉球大学所蔵の写本から、この文章に関連部分は右で、中央の4行がそれである。

初行に「一年」とあるが、他の写本では「一先年」となっている。



2) 「武備志」とは、1621年に明の茅元儀（1594～1640年）が編纂し、刊行された全240巻に及ぶ総合武術書で、膨大な図譜を添付し以下の5項目からなる。即ち、「兵訣評」18巻、「戦略考」33巻、「陣練制」41巻、「軍資乘」55巻、「占度載」93巻である。これよりも早く、戚継光（1528～88年）が1560年に著した武術書「紀効新書」があって、両者ともに並び称される。他に、「沖縄伝武備志」が伝来している。この本は那覇手を「剛柔流」を最初に命名した宮城長順（1888～1953年）が福州で入手して持ち帰ったもので、茅元儀の「武備志」とは異なる。沖縄伝の方は、福建省で18世紀初頭に発生した少林十八羅漢拳の一派「白鶴拳」門派の技術書である。剛柔流の名は、この中にある「拳法八句」から生まれた。



左上は寛政年間（1789～1801年）に本土で摸刻された武備志。右上は「詳説沖縄空手道」(上地完英監修)220、221頁に記載されている図と説明書き。左下は筆者が所持する「沖縄伝武備志」(翻訳者・大塚忠彦、監修・楊名時)の表紙。右下は「沖縄伝武備志」に掲載されている図と説明書きである。

3) 潮平親雲上が土佐に流れ着いたのは1762年で、その直前の冊封使は1756年に来琉しており、正使は全魁（翰林院侍読）、副使は周煌（翰林院編修）である。勿論、公相君という名ではない。役職名の「翰林院」とは、皇帝直属の秘書室的存在で、書物の編纂、詔勅の起草などを行う部署で、そこには有為な人材が起用され、時によって中央官庁や地方の要職に任命されるなど、学問や政治の最高の人材が揃う機関で、訳語としてAcademy（アカデミー）が使われる。

4) 暴風雨によって土佐に流さ着いた琉球船は、島村幸一（1954年～）立正大学教授（文学部長）の論文「土佐漂着の琉球人」によれば都合三回である。最初は1705年（宝永2年）に幡多郡清水浦へのもので、二回目は1762年（宝暦11年）幡多郡柏島市沖を漂流中に発見され宿毛市の大島に曳航され「大島筆記」を残した。三回目は1795年（寛政7年）であった。

初回と三回目の漂着記録は、いずれも冒頭に漂着メンバーを記し、士族については職、位階と名を、士族以外の者は職、名、年齢、出身地で、漂着までの経緯と武器の有無や宗旨を記し、併せて琉球情報と中国情報がアトランダムに記されるに止まる。この二回目だけが、戸部良熙を中心とする人たちの優れた学識と、それに応えた潮平親雲上の経験や知識、教養によるところが大きいと、島村教授は論評（同論文92頁）している。また、『大島筆記』の冒頭に当たる一、二巻のところ、他の漂着記録の内容に相当するものである。

5) クーサンクールの呼び名について、糸東流は「コウソウケン」（公相君）、和道流は「クーシャンクー」、松濤館流は「観空」（船越義珍が型を漢字表記改めた際に名付けられた）である。ただし、7)項以下に記す「チャタンヤラ・・・」の場合、糸東流以外は「チャタンヤラクーシャンクー」と呼んでいる。

6) 元来、クーサンクールの型は三種あって、クーサンクー大、クーサンクー小、四方クーサンクーがそれである。現在、競技大会で好んで選択されるチャタンヤラクーサンクーは、クーサンクー大に相当する。また、前項のローハイのところでも三つの型があると記した。元々、型が編み出される過程において、三つの型が作られるケースが多かったと聞くので、クーサンクーの場合もその意味から三つであったのかどうかは、筆者は詳らかにしない。

7) チャタンヤラクーサンクールの型は、今や大会の花形と言っていいくらいで、所属する流派を問わず演武する者が多い。この型を保存してきたのは北谷の屋良家で、屋良から沖縄県の喜屋武朝徳（きやん ちょうとく、1875～1945年）に伝授されたのが世に出る始まりとなった。

喜屋武長徳は、1908年（明治41年）38歳の時に首里から中頭郡読谷村に移住した。理由は二つあって、一つには糊口を凌ぐ（生活維持）のため、次いで近くに古来の空手を受け継ぐ北谷屋良（チャタンヤラ）が住んでいるという噂からであった。

北谷屋良とは、「北谷間切屋良村」（現在の嘉手納町屋良）を所領とした屋良家のことで、琉球国時代の士族は所領した土地（あるいは島）の名を姓とする習慣からの名乗りであった。平たく言うなら、「北谷間切の屋良さん」である。



屋良家五代目の屋良利導（1740～1812年）は武術に秀で、このクーサンクの他に「北谷屋良の棍」、「北谷屋良の釵」の型を編み出し、今日まで伝承されている。棍とは武器としての棒のことで、本土では棒術という。釵の字は本来簪（かんざし）の意味で、三又の形状が似ていることからこの字が使われたもので、釵は左の写真である。同じ釵を両手で二本用いるのが普通である。本土では、二又の十手として使われた。

朝徳が教えを請うたのは、屋良家八代目に当たる屋良利正で、何度も断られながら懇願して許しを得、漸く伝授されたのがチャタンヤラクーサンクであった。今行われている他のクーサンクの原形とみなされている。

朝徳から弟子の沖縄松林流・長嶺将真（1907～97年）に伝授されたが、本土に伝わったのは戦後暫く経ってからである。糸東流の村田員数が松林流の高弟に教わり、更に沖縄に出向き長嶺道場で再確認したという。



弟子を指導する喜屋武朝徳

このことに関する記事とし「月刊空手道」に掲載され、筆者はコピーを保存していたが何年何月号であったか記録していなかった。



8) 競技大会でチャタンヤラクーサンクーが演じられたのは、1993年からでないかと推測される。何故ならば、筆者が設営運営に関わった1992年（平成4年）の第47回国民体育大会（べにばな国体）空手道競技会は、競技会史上唯一となる天皇皇后両陛下の行幸を戴いた。その大会では、未だどの選手もチャタンヤラクーサンクーを演じていなかったことによる。但し、同年12月の全日本空手道選手権大会で誰かが演じたかどうかまでは確認していない。

その後、1994年マレーシア開催で開催された第12回世界空手道選手権大会において、代表選手の横山久美がチャタンヤラクーサンクーを演じて優勝したと記録に残る。

なお、余談だが喜屋武朝徳に関して、今野 敏著の「チャンワミーグワー」という小説がある。今野氏は、朝徳という人物と、空手修行過程をよく調査された内容により構成されていると思う。

(つづく)

参考文献等（発行年月は著書に記載のまま）

- ・ 藤原稜三著「格闘技の歴史」、1990年3月30日第1版、ベースボールマガジン社発行
- ・ 上地完英監修「詳説沖縄空手道」、1977年11月1日上地流空手道協会発行
- ・ 宮城栄昌著「沖縄の歴史」、昭和43年11月26日初版、日本放送出版協会発行
- ・ 新里恵二著「沖縄史を語る」、1970年9月1日初版、(株)勁草書房発行
- ・ 池田奉秀著「古流現代空手道集義第一巻」、昭和50年7月25日初版、日本空手道常心門出版部発行
- ・ 喜納大作、上里隆史共著「琉球王国のすべて」、2012年6月20日初版、(株)河出書房新社発行
- ・ 上里隆史著「オモシロ琉球・沖縄史」2011年6月25日初版、(株)角川学芸出版発行
- ・ 外間守善著「沖縄の歴史と文化」1686年4月25日初版、(株)中央公論新社発行
- ・ 比嘉朝進著「歴史・伝説にみる沖縄女性」2005年12月初版、那覇出版社
- ・ 「空手道・保存版」、執筆者・大塚博紀他31名、昭和52年3月初版発行、株式会社創造
- ・ 山里永吉著「首里城内の女たち」昭和47年4月20日初版、閣文社発行
- ・ 沖縄県教育庁文化課編集「中山世鑑」昭和57年10月15日、沖縄県教育庁発行
- ・ 井沢元彦著「日本史集中講座」、平成19年6月20日初版、祥伝社発行
- ・ 金城昭男著「空手伝真録」、初版平成11年7月10日、沖縄図書センター発行
- ・ 埴原和郎著「日本人の骨とルーツ」、初版平成9年9月30日、角川書店発行

- ・ 諸橋轍次著「大漢和辞典（辞典）」、初版昭和 32 年 8 月 25 日、大修館書店発行
- ・ 大塚忠彦翻訳、楊 明時監修「沖縄伝武備志」、初版 1986 年 4 月、ベースボール・マガジン社発行
- ・ 島村幸一（立正大学教授）の論文、『土佐漂着の「琉球人」』
- ・ 今野 敏著「チャンウミーグワー」、初版 2017 年 12 月、株式会社集英社発行
- ・ 「月刊 空手道」、株式会社福昌堂発行